

## 愛知県がんセンターにおける頭頸部がん術後患者のアピアランスケア確立に向けた多職種共同支援開発研究

研究代表者： 愛知県がんセンター・形成外科・部長・高成啓介

研究協力者： 愛知県がんセンター・形成外科・医長・中村亮太

愛知県がんセンター・形成外科・医長・奥村誠子

愛知県がんセンター・形成外科・医長・丸山陽子

愛知県がんセンター・形成外科・医員・中川路美雲

### 目的

近年のがん治療の発展により多くの領域でのがん治療成績は向上してきており、これに伴いがんの診断を受けたのちに治療や治療後の問題と向き合いながら生活する「がんサバイバー」が増加している。頭頸部がんの領域でもがん治療を乗り越えたのちに社会復帰を目指す患者が増加しているが、頭頸部がん手術後の特徴的な状況として、頭部、顔面や頸部といったアピアランスに大きく関わる部分に治療の主体があるという問題がある。例えば上顎がんの手術では上顎の切除により眼窩や頬、鼻翼、口唇の位置に偏位が起りやすく、下歯肉がんの手術では下顎や口唇の形態が変化する。耳下腺がんで顔面神経の合併切除・再建を行なった場合は顔面神経麻痺により顔面表情筋の弛緩が起り、形態が大きく変化する。また、頸部郭清を伴う手術では頸部に醜状瘢痕が残存してしまう。このように、頭頸部がん術後の患者ではアピアランス問題が起りやすく、これにより社会復帰への意欲が減退したり妨げになる、もしくは日常生活への影響が残るといった問題が起りやすい。国内外では2000年ごろからアピアランスケアについて再考する必要があるという機運が高まっており、厚生労働省の第3期(2018-2022)がん対策推進基本計画でも研究課題の一つとしてがん患者のアピアランスケアが挙げられている。また、国立がん研究センター中央病院ではアピアランス支援センターが2013年に開設され、アピアランス問題をもつ患者の支援に取り組んでいる。愛知県がんセンターにおいてもアピアランスケア体制を確立することは急務であると考え、本研究の着想に至った。

**成果**

本年度の成果は以下の2点である。

- (1) 愛知県がんセンターにおける「眼球摘出症例と義眼・エピテーゼ装着率の調査」
- (2) 愛知県がんセンターでのアピアランスケアチームの立ち上げ

(1) 「眼球摘出症例と義眼・エピテーゼ装着率の調査」のまとめ

過去20年間の間に眼球摘出を受けた75例の調査を行った。原疾患としては上顎癌が最も多く、眼窩悪性腫瘍、篩骨洞癌の順であった。ほとんどは拡大上顎全摘・頭蓋底切除と併施されていた。調査した75例の5年生存率は54.1%、10年生存率は38.0%と、以前の他施設の報告による2割以下（Carrilo et. al. 2005, EJSO, 文献3）に比べて良い成績と考えられた。この中で何らかの整容的な修正手術を行った症例が20%、エピテーゼ装着が6.7%、義眼装着が6.7%であった。

原疾患の治療成績が向上してきているが依然として整容的介入ができていない症例は少ないと考えられた。これは術後治療や年齢、社会生活などの影響もあると思われるが、まだまだアピアランスケアに対する医療者および患者の認知度が低いことも大きな要因と考えられた。対応として、院内のアピアランスケアチームの立ち上げ、医療者および患者に対しアピアランスケアの重要性を周知していくことが必要と考えられた。

(2) 愛知県がんセンターでのアピアランスケアチーム立ち上げ

関係各科の医師、看護師、ウィッグ業者、義眼・エピテーゼ装具業者などに面談を行い、必要な組織の形態を検討した。チーム構成として医師（各診療科）、看護師（がん看護認定看護師、緩和ケア認定看護師、がん化学療法認定看護師、皮膚・排泄ケア認定看護師など）、薬剤師、事務を含むチームを想定し、活動内容として以下の目標を設定した。

1. がん看護外来を含む、院内各所でアピアランス問題の拾い上げを行い、患者への情報提供や看護指導、専門科による治療を速やかに受けることができる体制を作る
2. 院内勉強会、患者勉強会などの開催
3. 病院HP、掲示板などでの広報活動
4. アピアランス問題に関する患者アンケート調査（臨床研究）

最終的に上記の職種を含む16名からなる組織を作成した。

**展望**

今後は、立ち上げたアピアランスケアチームを軸として、目標を一つずつ遂行していく予

定である。現在、目標4の患者アンケート調査について研究計画をたて、倫理委員会申請中である。

文献

1. A. Martel, S. Nahon-Estève, L. Gastaud, C. Bertolotto, S. Lassalle, S. Baillif, A. Charles. Incidence of Orbital Exenteration: A Nationwide Study in France over the 2006-2017 Period. *Ophthalmic Epidemiol.* 2021 Apr;28(2):169-174.
2. Arnaud Martel, Stephanie Baillif, Sacha Nahon-Estève, Lauris Gastaud, Corine Bertolotto, Sandra Lassalle, Jacques Lagier, Mehrad Hamedani, Gilles Poissonnet. Orbital exenteration: an updated review with perspectives. *Surv Ophthalmol.* 2021 Sep-Oct;66(5):856-876.
3. J F Carrillo, A Güemes, M C Ramírez-Ortega, L F Oñate-O Prognostic factors in maxillary sinus and nasal cavity carcinoma. *Eur J Surg Oncol.* 2005 Dec;31(10):1206-12.
4. Naoki Nishio, Masazumi Fujii, Yuichiro Hayashi, Mariko Hiramatsu, Takashi Maruo, Kenichiro Iwami, Yuzuru Kamei, Shunjiro Yagi, Keisuke Takanari, Yasushi Fujimoto Preoperative surgical simulation and validation of the line of resection in anterolateral craniofacial resection of advanced sinonasal sinus carcinoma. *Head Neck.* 2017 Mar;39(3):512-519.
5. Mukoyama N, Nishio N, Kimura H, Kishi S, Tokura T, Kimura H, Hiramatsu M, Maruo T, Tsuzuki H, Fujii M, Iwami K, Takanari K, Kamei Y, Ozaki N, Sone M, Fujimoto Y. Prospective Evaluation of Health-Related Quality of Life in Patients Undergoing Anterolateral Craniofacial Resection with Orbital Exenteration *J Neurol Surg B Skull Base.* 2020 Oct;81(5):585-593.

発表

学会発表 第34回日本眼瞼義眼床手術学会・2023年2月11日